

見えなくてもここにいる

～セクシュアルマイノリティに関する活動に参加して
(15006A)

おかだ なつみ
岡田 夏実 (人文・文化学群 比較文化学類 4年)



はじめに

一昨年の6月ごろ、教育系の先輩がセクシュアルマイノリティに関するT-ACT企画を始めるという話を聞いて、興味があり勉強していた私はそのT-ACTに参加することにしました。セクシュアルマイノリティとは性にまつわる場面で少数派になる人びとのことで、最近ではゲイ、レズビアン、バイセクシュアル、トランスジェンダーの頭文字を取ってLGBTと呼ばれることが多いですが、それ以外にもさまざまなあり方の方がいます。このようなセクシュアルマイノリティは、日本社会に約7%程度いると言われていました。「会ったことないや」「私の周りにはいない」と思う人もいるかもしれません。しかし、彼らはカミングアウトすることによっていじめや差別を受けたり、人間関係が壊れたりしてしまうことを恐れて、普段の生活では明らかにしないことも多いのです。「いない」のではなく、「見えなくなってしまう」のです。

セクシュアルマイノリティ×学校教育

学校では、クラスに1～2人いると言われるセクシュアルマイノリティの子どもは、周りの生徒や先生、家族の無理解や偏見のせいで苦しんでいることが多いです。特に、先生は子どもにとって影響力がありながら、セクシュアルマイノリティについて学ぶ機会は今までありませんでした。この企画はこれから教員になる人にセクシュアルマイノリティの生徒との接し方を知ってほしいというコンセプトで始まりました。

始めは手探りの連続でした。どうしたらセクシュアルマイノリティという語を聞いたこともない人にもわかりやすく説明できるか、セクシュアルマイノリティ当事者への配慮、ワークショップの進め方など、試行錯誤しながら話し合いは続きました。講座では質問がたくさん飛び交い、参加者・スタッフともに大変熱のこもったものとなりました。タイムスケジュールの管理という課題が残ったものの、「参加して良かった」と言ってくれる人が多く、うれしかったです。

セクシュアルマイノリティ×医療

「セクシュアルマイノリティ×学校教育」発足から約1年後、「セクシュアルマイノリティ×医療」という企画が発足しました。病院は誰もが利用する場所であるにも関わらず、医療従事者の間でもセクシュアルマイノリティへの理解はまだ進んでいません。このような状況で、無理解や偏見に遭ったセクシュアルマイノリティは病院から足が遠のいて病気の

発見が遅れたりするといわれています。また、セクシュアルマイノリティが注意すべき病気もあります。

このような問題意識で、「×学校教育」のメンバーに医療系の学生を加え、企画は発足しました。「×学校教育」に比べさらに高度な専門知識が求められるため、パートナーの先生にチェックをしていただき、なるべくわかりやすく間違いがないように努めました。当日はあいにくの悪天候の中、アットホームな雰囲気ですディスカッションを進めることができました。宣伝や臨機応変な対応に大きな課題が残ったものの、「勉強になった」という感想をいただき、手ごたえを感じる結果となりました。

IDAHO記念にじひろピクニック、そしてこれから

このようなT-ACTを経て、私が今年企画したのが「IDAHO記念にじひろピクニック」です。セクシュアルマイノリティ当事者とそうでない人が一緒に楽しめるようなイベントを企画したいと思い、ピクニックをすることを思いつきました。ピクニックは天気にも恵まれ、和気あいあいとした雰囲気の中で行われました。このように、セクシュアルマイノリティもそうでない人も同じ社会の一員として過ごしていることを多くの人に知ってもらいたいと思います。

「×学校教育」を経て、現在は「筑波大学LGBTQAサークルにじひろ」として活動していますが、今後もこのようなT-ACT企画を開催していくつもりです。「見えなくなってしまう」ものの存在を意識し、セクシュアルマイノリティもそうでない人も過ごしやすい大学づくりに向けて活動していきたいと思っています。



にじひろピクニックのポスター